

私の提言 荒川哲郎

学校の教育への提言

1) 危険(リスク)のある状況で自分を発見する

現在、「障害」のある人が志向している自立生活を実現するための自立生活プログラムを参考に考えてみます。そのなかに現実の社会状況で、自ら外出を計画して、いろいろな経験することに挑戦する「フィールドトリップ」と呼ばれる実習があります。介助者の探しかたを知識としてわかっている、実際には体験しないとわかりません。そこで電車に乗ったり、買い物をする状況で、見ず知らずの人達へ介助を求める経験をします。いままで、社会への不信、他人からの介助を得ることの不安があったが、声をかければ、介助する人が案外多くいることを身をもって、体験します。そして、介助する人との会話、お礼の言い方、別れかたも自分なりに実際の体験から見出しします。時には、うまくいかないこともあります。今後に生きると期待もします。特に「朝、皆が急いでいる時に、なんで、外出するんや」などの自分の状況を無視、排除する発言に向きあう自分をつくることも大切になります。このような「差別」は地域での生活をしようとする意欲を根底から覆すこともありますので、一緒に「それはおかしい」と疑問を持ち、応援する仲間との連帯、サポートを必要とする場合もあります。

私はこのフィールドトリップ(現実の体験)は学校の教育へいくつかの問題提起をしていると考えています。一つには、障害のある人がみずから、リスクのある状況にはいり、自らの責任で問題を解決している意味であります。二つ目には「できること」「できないこと」をはっきりさせて、助けを求める必然性を本人が主体的に確認していることです。そして三番目に、最初から答えが用意されていない計画の実行であります。現実には、まわりの人から無視されることもあるでしょう、「親切な人」との出会いもあるでしょう。そこでの会話の内容も予測できません。教師には「不確実な未来に賭ける」解答のない教育をするには勇気が必要です。しかし現実には答えを予め用意して対応できるものだけではありません。教えなければならぬ立場に追い込まれている教育の現状をブレイクして、「こどもたちと共に考え、こどもに任せる」教育が求められています。こども達はこれらの未知への挑戦を通して、「自分の決定、責任」の意味の深さが身に滲みてわかり、自分の姿、他人の心の動きがよく見えてくることもあります。「これまで大目にみてもらっていたことが多かった。自分で責任をとろう」と気持ち動くこともあります。さらに「責任がとれる自分」を大切にしようとする自分への信頼を考えるこどもたちもいます。フィールドトリップは自立の技法の獲得にすぎないと考えられますが、自己信頼、自分を愛する意識への変革の機会にもなるのではないのでしょうか。

2) 失敗は成功のもとではなく、次の失敗のためである

トイレの話です。山口さんは最初の失敗の時は非常に落ち込んだそうです。自分が惨めになり、

介助の人にも申し訳ないと思いました。ところが介助に来ていた女性が「落ち込まなくてもいいんじゃない。洗えば済むことでしょ」とサラリと言ったそうです。「あー。このように考えるのか」と山口さんは落ち込みから脱出したと話します。そして次の失敗からあまり落ち込まなくなりました。まわりの人のとっさにでてきた言葉が人の気持ちを救い出す。いろいろな人の考えとの出会いは「常識の束縛」からの解放を生み出すこともあります。「失敗はマイナスである」との常識を超える知恵を生み出すこともあります。「失敗は成功のもとではなく、次の失敗の時、落ち込まなくてもいい準備になった。結果としては次の失敗のためになった。」と彼女は語ります。失敗する現実から教訓を学ぶことは多くあります。しかし私達は失敗をしないように、転ばないように、先に杖をだすことが多いのです。特に失敗をする前に、失敗した後の気持ちと「何もしないこと」を天秤にかけてしまいます。「障害」のある人自身も何もしないことを安全として、家にいることを常としている人達もたくさんいます。一年で教える位しか外出しない「障害」のある人もいます。しかし、「何もしないことからは学べなく、失敗もしながらも学ぶことが多い」ことは現実です。

学校教育のなかで、「失敗も大切な経験」ときちんと位置づけをして、教育をすすめることは、大切なことではないでしょうか。教師が教育的手立てを十分に考え、準備をするのが、教育の常識となっています。たとえ、授業が不自然に感じられても、教師はきちんと道筋をつくり、こども達にわかりやすい授業をすることが求められています。特に、「障害」のある人に「失敗させると、かわいそう」「取りかえしのつかないことになる」との同情、責任論まで、教育で議論され、現実の社会で生きるための経験の積み重ねがむずかしい場合があります。

「障害」のある人達が「失敗をする経験も権利としたい」との主張をする意味を「自分の痛みを感じながら、自分の決めたことの責任を取る」と、とらえるならば、「かなりの覚悟」がみられます。そこで、次のような課題が私たちに提起されます。「本当にこどもと痛みを分かちあえるのだろうか。また痛みを分かちあえる関係を日頃から創れているのだろうか」が問われています。また「ひとりのこどもが落ち込んだ時、いかに人間関係を繋ぎながら、皆が一緒に立ち上がるのか」をテーマにする教育の課題も生まれてきます。

3) 見ず知らずの人に声をかけられますか？

親しい人、たとえば家族、学校の先生などからの介助と見ず知らずの他人からの介助には大きな違いがあります。家族以外の人に「困った時に助けを求めることに、大きな壁を感じる」ことは、一人での外出の意識のバリアになります。「障害」のある人への介助の経験では、トイレの介助など、体の中でも人に見せたくない部分を、介助することには、抵抗があります。パンツをおろす、お尻を拭く、便を流すなど、本人はもちろん介助の側も気づかうことがあります。

しかし人間は生身であります。いつ、何が起きるのかは誰もわかりません。急にトイレに行きたくなり、我慢できないこともあります。そして見ず知らずの人からの介助が必要になる時もあります。地域で生活をするためには、買い物をするなどの外出は、不可欠です。見ず知らずの人からいろいろな介助を得ることも予想して、生活することも必要となります。しかし、養護学校

に在籍した時だけでなく、卒業した後も「見ず知らずの人に話かけたこともないし、話かけられたことはほとんどなかった。そして知らない人達との人間関係にとまどいがあった」と壁について語る人もいます。また、地域での「自立」した生活を始めた人が、外出した時、たまたま、車椅子が溝にはまったそうです。その時、彼は通りがかりの人達に「どのように助けをもとめるのか」がわからなくて、長い間、助けられるのを待っていたそうです。その時の教訓から、彼は家族から離れて生きていくためには、まず自ら積極的にいろいろな人達との人間関係をつくりだすことが、必要な条件になることとわかり、外出する時、見ず知らずの人達との人間関係を機会を積極的にもつようになったそうです。

見ず知らずの人へ助けを求めることはどのような壁があるのでしょうか。電動車椅子で歩く友が、駅の長い階段を、人に囲まれるようにして、持ち上げられ、上る時、「こんな迷惑をかけてまで、外に出たくないな」と、つぶやきました。「迷惑なんて思っていないよ。もっと軽く、考えるといいよ」と、手伝いをした若い人が言いました。いろいろな人たちと出会う経験をたくさんして、それを楽しめるようになることが必要なのではないのでしょうか。「迷惑」と思い込んでいる時、瞬間に考えを変えさせてくれるのは、「人」です。人と人の関係は大切にしたいですね。

このような現実を考え、学校の教育を再構築をどのようにするのは大きな課題になると考えられます。しかし、それを求めることもたちと教師とのあいだの価値観のズレだけではなく、教育の出発点のズレも見えてきます。いろいろな現実から出発することが学校の教育にも求められているのでしょうか。